

氏名	ふるかわ あきら 古川 彰
学位(専攻分野)	博士(農学)
学位記番号	論農博第2464号
学位授与の日付	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	農山村の変容と生活知の論理 ——生活論の視点から——

論文調査委員 (主査) 教授 祖田 修 教授 野田 公夫 教授 加賀爪 優

論文内容の要旨

本論文は、農山村の日常の生活世界とその変容に視点をすえ、転換期にある現代社会を批判的に読み解いていく試みである。そして危機的状況に置かれた農山村社会がその状況の中で、いかに巧妙な主体として立ち上がり、よりよい生活に向けて事態を改善していく可能性を秘めているかを、具体的な事例をもとにして検討することを目的としている。

特に、伝統的に社会的・文化的生活単位であった村そのもののもっている可塑性に注目し、それ自身がもつ新たな状況に対する創造性や抵抗性あるいは、既存の体制を修正する交渉力や主体性について考察している。村落社会を、受動的存在とする見方とは一線を画し、村の再生的営みを主体性と捉え、明示的に考察した。

第1章第1節は、本論文の基本的な立場である、地域生活者の日常世界をそこで暮らす人々の「生活」の視点から明らかにするための方法としての「生活環境主義」の立場、方法論、調査法について論じた。この論文全体が生活環境主義の展開でもある。第2節では環境社会学の議論のなかで生活環境主義を位置づけることも意図して、この20年間の環境社会学的な研究の整理を試みている。

第2章は小さな村「共同体」の主体形成を論じている。その際主体とは、小さな共同体の生活システムを形成する総体としての主体である。明治・大正期の村落支配構造の変容を、農事・政事と一体化して村運営の最も主要な構成要素であった神事を通して検討した。村の日常生活が村事(むらごと)と家事(いえごと)とに分離されず、個別の家事でさえも村事と関わっていたのは、まさにこの神事が政事と農事とを結びつけていたことを明らかにしている。後半では、明治大正期に村の河川改修工事を、誰がしていたのかを検討することで、村と地方行政そして国家との関係の中で、その時々村の「主体」形成がなされた地域社会の可変性を明らかにした。

第3章は、主体としての村を論じる場合の、「村」と「家」の理論的背景を明らかにするために、第2章で論じた村の構造的特質を社会学・人類学の村落構造論、および家(同族)について、研究史を整理し位置づけている。それによって、対象村落における日常生活の出来事とその意味や変容過程を、歴史的、理論的に把握している。

第4章では、第2章で論じた村の日常生活の変容を具体的に記述し、その「生活の論理」を明らかにしている。すなわち1節では水利用に焦点を当て、2節では同じテーマを、「虫送り」という実践の変容過程から追求し、明治以降の生活知と科学知の関係を明瞭に記述している。3節では農民自身の『記録』の中の一年を取り上げ、村のルーティン化された日常が長期的には大きく変化しているとともに、内外の諸力を選択的、自立的に取り込む、人々の生活知を論じている。

第5章は第4章と同様のテーマを2、4章とは異なるフィールドで検討したものである。1節では日本の山村の中で維持され、長期循環システムが作り出していた景観(循環の景観)が、高度経済成長期の森林政策によって短期化、モノカルチャー化する事実を、循環の景観の喪失として記述している。2節では世界的に注目されるヒマラヤの森林環境保護運動や政策が、その中で暮らしている人々の生活にどのような問題を引き起こし、変化をもたらしたかを記述し、環境保全における小さな共同体の生活実践の意味を論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、転換期にある現代農村社会の変容過程と現実とを、村という生活世界において批判的に検討しつつ、その主体性すなわち村再生への力、創造性などに注目しようとしたものである。村は単に受動的、消極的存在ではなく、むしろ能動的、積極的側面を持ち、村の再編・再生の営みを、具体的事例を通して明らかにしようとしたものである。

そして村の営みの背後に、その内奥に築き上げられてきた、「生活知」の力が働いていることを指摘しようとしている。またそうした村の環境問題をめぐる動きについて、ヒマラヤ山中の村落調査からも、日本におけると同様のものを見出し、村社会の営みについて、差異性とともにも共通性を指摘した。

評価すべき点は次の通りである。

第1に、環境社会学の立場から、住民の日常生活の中で経験的に育まれた生活視点に立って、村の現実を捉えようとする、地に付いた方法論に基づいて論述している。

第2に、従来の家、村、そこでの環境をめぐる議論を包括的に整理し、新たな分析視点を付加しようとしたものである。その際、250年にわたる農民の記録などを発掘し、それらを分析した事実に基づいて論理を構築したものである。

第3に、ムラを静的、固定的、受動的に捉えず、外からの圧力や影響に対し、選択的、自立的、積極的に対応するしたたかさを秘めたものであることを究明、評価している。

第4に、国内の農村調査とともに、ヒマラヤ山村の環境と生活をめぐる動きをも調査し、その差異性と共通性を明らかにし、農村社会研究に国際的比較検討の視点を加えた。

以上のように、本論文は農村社会の主体的・内発的な変化過程について、独自の視点から具体的に論証したものであり、農村社会学、地域社会学、環境社会学の発展に資するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお平成15年1月16日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。